

A Study on History of Football in Britain 10

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/635 |

英国におけるフットボールの歴史に関する研究 (10)

～パブリック・スクールにおけるゲーム礼賛について～

秦 修 司

A Study on History of Football in Britain (X)

～The Public School Game Cult～

Shuji HATA

緒 言

トーマス・アーノルドがラグビーの校長に就任したのは1828年で33歳の時であった。14年間の校長就任期間で英国パブリック・スクールのシステムを変革するよう運命づけられ、付随的に英国の人々のゲームに対する姿勢態度を変えることになった。

ここでは英国におけるパブリック・スクールのゲーム礼賛がアーノルドや彼の信奉者によって着手された小さな発端からどのように発達していったか、そしてさらにゲーム礼賛が、ある二、三のパブリック・スクールにおいて行き過ぎの極みまでに達したかについて考究する。

本 論

18世紀末、教育のある人々はフットボールを下層階級にしか向かないと蔑んだ。パブリック・スクールの生徒がフットボールを行ったならば、フットボールを行ったのは確かであるが、それを若気の至りと看做しフットボールを忘れてしまうことができた。パブリック・スクールの教師でさえ、多分にこの意見の大部分を支持した。彼等はマルカスターの啓発的意見¹⁾にほとんど同情を示さなかったし、生徒が一日中勉学するのは不可能であったので、せいぜいゲームを必要悪と看做した。1788年から1838年までシュリューズベリー校の校長であったサミュエル・バトラーはフットボールを「せいぜい肉屋の伴向き」²⁾と記述したが、彼の表現のやり方

は、多分に彼自身小売商の子息であり、ラグビー校においてスノビズムの犠牲であった事実によって無意識のうちに条件づけられたと思われる。しかし、バトラーのフットボールに対する姿勢が19世紀末の典型であった。生徒がゲームを行うことについての、そしてノン・アカデミックな活動すべてについての公式の方針は無干渉の方針をとることであった。生徒が余暇時間に行うことは他の者の関心を持つところではなかった。

しかし、バトラーがフットボールを攻撃し漕艇を禁止していたその一方、後にラグビー校のアーノルドの名と関連する新しい気風が感じられ始めた。かつて教師と生徒の間には、彼等が対面するのは教室のみであるという大きな溝があったが、今や教師は生徒の知的発達と同様、精神的、身体的発達のすべての面に関心を持たなければならないという意識が芽生え始めた。ここである程度は精神的な面と関連づけるが、特に身体的な面について考えてみたい。19世紀の最初の20年間でさえ、チャールズ・ワーズワースから知るように、イートン校の教師はゲームを学業成績に次いで評価したが、ゲームに関心を持ち始めた。³⁾他のパブリック・スクールでも同じ類のことが起こっていたのは確かである。シュリューズベリー校においてでさえ、バトラーの後継者で1864年から1889年まで校長にあったベンジャミン・ケネディはゲームを行うための競技場を準備し、週三日はフットボールを行うことを採り入れる程度まで時代の気風に

沿って立ち振るった。しかし、彼はシュリューズベリー校の校長に就く2、3年前ハーローの助教師にあった時、ゲームは学習の障害になるとして、彼自身はゲームにはまったく熱意を示さなかった。⁴⁾しかし、パブリック・スクールのゲーム礼賛の動きはラグビーのトーマス・アーノルドの出現とともに最高に達した。

ここでトーマス・アーノルドがパブリック・スクール全体を通じて採り入れた改革、及ぼした影響、そしてさらに死後1世紀以上に渡って及ぼした影響ではなく、フットボールの狭い領域に限定して考えてみる。アーノルドはバトラーのようにゲームに対して敵意は持っていなかったが、ゲームにはほとんど関心を示さなかったようである。Tom Brown's Schooldaysの中にアーノルドや彼の家族の幾人かは校長寮の試合を眺めていて、「少年の連中に劣らず、校長寮の勝利を切望している模様である」⁵⁾とある。しかし、ウイリアム・アーノルドの冊子であるThe Book of Rugby School(1856)から明らかのように、トーマス・アーノルドの子息の1人はフットボールに熱中したけれども校長自身が時たま試合を眺める以上のことをしたという証拠はまったくない。評論家によって時々なされるアーノルドは勉学よりゲームを優先したという非難はまったく根拠のないものである。事実、ほとんどの生徒の頭の中では勉学よりもゲームが優先していた。Tom Brown's Schooldaysの中で、兄のブルークがそれについて次のように述べている。

私は将来、ベイリオウル⁶⁾の奨学資金を獲得するよりは、わが寮の対外試合を続けて2度勝った方が有難いです。⁷⁾

しかしアーノルドは、多分に、生徒の余暇の適切な活動として昔からの飲酒、賭博そして密猟よりはフットボールや他のゲームを歓迎した。アーノルド自身でないにせよ他の者が不道徳に対する対抗手段、規律なき行動の治療法としてスポーツを意図的に奨励することを示唆した。最初にこの方針を提唱したのはQuarterly

Reviewの1834年8月号の筆者であったと思われる。⁸⁾アーノルドの信奉者の多くは彼等の教育方針の一部として意識的にスポーツを採り入れた。これらの人々、ラグビー校の卒業生、又はラグビー校のアーノルドの下で訓練を受けその後彼等自身パブリック・スクールの校長になった助教師などがラグビー校をモデルとして実質的に現代のパブリック・スクールのシステムを形成した。そのようにしてアーノルドの形を変えた方法が英国中で実施された。

スポーツを特に強調したのは1852年にマールバラ校の校長に就いたジョージ・エドワード・コットンであった。彼は一般的にTom Brown's Schooldaysに登場する若い教師の原形と看做された人物であった。彼はラグビー校の助教師にあった時、フットボールが安全弁として如何に効果的であるかを見てきたので、マールバラ校でフットボールを奨励し、意図的に学校生活の中にフットボールを採り入れた。それ以来、マールバラ校はラグビー校式のフットボールを行う主要なパブリック・スクールの1つとして残ってきたので、マールバラ校の卒業生は大学におけるフットボールの復興においてラグビー校の卒業生と同様、極めて重要な役割を果たした。主要なパブリック・スクールのうち、そのどれがラグビー式のフットボールを行っていたかもしくは、いなかったか、挙げることによって、直接ラグビー校の影響を受けたことを示すことが可能である。⁹⁾

この時までにはゲームを嫌悪し、是認しなかった人々でさえゲームの有用性を認めざるを得なくなった。そのような人にマールバラ校のコットン校長の下で助教師を務め、後に一時期ハーロー校で助教師を務めたあと、1871年にコットンのあとを受けてマールバラ校の校長となったディーン・ファーラーがあった。ファーラーはアスレティシズムに激しく反対したと言われており、彼の著書である二つの有名なパブリック・スクールについての物語である、Eric, or Little by Little(1858)とSt. Winifred's or the

World of School (1862) では、フットボールについて記述するのを意図的にさし控えていたようである。しかし、彼は教師と生徒の間にある大きな溝を埋めるためにスポーツを利用する用意があった。1860年までにこの溝は極めて効果的に埋められたので教師たちは校長でさえも生徒とフットボールを行った。¹⁰⁾

これらの変化がパブリック・スクールのゲームに及ぼした影響についての興味深い解説がルートリッジ著の Handbook of Football (1867) の序文に見られる。作者は不詳であるが、多分に20年前の自己の学校生活を回顧して、ラグビー校やラグビー校の影響を受けたパブリック・スクールから教師がその学校に来たことによって学校の中の雰囲気全体が変化したことを書きとめている。

身体が強く健康な仲間は肥らずに筋骨隆々になった。;あまり活動のない仲間は走力や持久力を向上させた。;寮や学校では、好敵手への寛大な感情がほとばしった。;……半休日は必ず試合があり酒場からは分別ない者が消え、邪悪な娯楽はすべて消滅した。¹¹⁾

フットボールや他のゲームは好ましくない活動の代用として有用であるばかりかより積極的な価値、つまり、忠誠心、自己犠牲、無私、協力、団結心、名誉意識、そして「よき敗者である」能力を教え込むのに利用可能であることを実感して次の段階になった。ゲームに対するこのような見方は多かれ少なかれ学校においては、その当時は斬新であった。それとともに英国民は、ゲームに熱中することによりその特別な価値を獲得するという考えを発達させてきたようである。「わがパブリック・スクールのイストモス祭典がイングランドを今日にするために多くのことをなしている。」と1857年9月の Quarterly が力説しており、さらにその筆者の見解では勉強不足よりは極めて危険である勉強のし過ぎを防止することによって、ゲームはこの結果を達成すると主張している。¹²⁾このこと

が真実であったのは確かであるが、パブリック・スクールにおいては勉強のし過ぎを予防するための手段を講ずる必要はなく、このような特別の正当化は用いられることがなかった。

そのようなのがビクトリア朝中期のパブリック・スクールを通して組織化されたゲームと称せられるものが確立された意見の一般的な傾向であった。この動きの背景にある目標や目的が正しかったのは疑いのないところであった。ゲームが組織化されただけで、それ以上のことが何もなかったならば、その結果は多分に効果的であったと思われる。しかし、事態は教師が生徒を完全にコントロールしていた寄宿制の学校において、やがてゲームが強制的になる程極端に至った。生徒は学校当局によって、ゲームを行うのを余儀なくされた。これは多分に当然のことであった。というのは生徒が飲酒、盗み、賭博などで余暇を過ごすのを予防するのが第一に優先すべきことであったからであった。後になってより建設的な目標が設立されたが、いったんそのシステムが始動したら、そのシステムがパブリック・スクールに押しつけられたので、システムが物事の自然律の不可避的部位となり極めて稀な場合にしか改良されるか、もしくは廃止されることはなかった。しかも、物事すべてを考慮に入れるとどんなゲーム、もしくはスポーツも自由意志とは別種のものであるべきであるというのは異常な状況であり名辞矛盾であった。

ある場合は、競技場がパブリック・スクールの学校生活の中心となり、ゲームは熱狂的な教師の掌中にあり、他のどんなことよりも優先されるようになった。これら熱狂的な教師の多くは、本来、ゲームは目的のために育成されてきたことを忘れていた。クリケットやフットボールはそれ自体が目的であると看做し、ゲームを生徒に強要するのが望ましいのかについてはまったく問題にされることがなかった。しかし、アスレティズムを擁護する者の多くはその状況を一般的な水準以上に処理するのに役立つと

同時に他の者の行為を正当化した理念を持っていた。これらの最も際立った者の1人はロレット校の校長アーモンドであったが、彼は、「健全な身体には健全な精神が宿る。」の熱狂的信奉者であった。彼は、「身体の幸福の法則は神の法則である。」と著述し、教育の目標を性格、体格、知力、作法、知識の順にし、知識を一番最後に置いた。¹³⁾事実、ロレット校の生徒は時間の大部分を屋外スポーツで過ごし、冬夏とも一日中、半ズボンと開襟シャツを着用していたが、他の同世代の者のほとんどがぶ厚くてびったりとした衣服を着用していた時にであった。それはビクトリア朝風の堅苦しさに対する効果的な対応であった。

アーモンドは特にフットボールに熱心であったので彼の意見や方法については、特別興味あるところである。

フットボールは、現代のあらゆる状況において、その語の真のそして広義の意味において最高の教育手段であろう。；というのは、学校が、町の少年がフットボールが繁栄をきわめることのない裕福な階級のあらゆる出来事の中で通常育てられる軟弱でわがままな生き方に対して正しく正々堂々とした闘いを挑んでいるとは考えられない。¹⁴⁾さらに続けて、

ゲームの目的は積極的な習慣、勢いある血液循環、男性的同情心、豊かな精神を備えた逞しい男性の創造にある。¹⁵⁾

と述べた。アーモンドはラグビーとアソシエーションのフットボールが分裂したあと、アソシエーション・フットボールについて下半身しか訓練するものでないとして嫌ったが、彼は生徒が有害な影響を受けずに週4回可能なラグビーのフットボールを好んだ。アーモンドは19世紀後半、フットボールに熱中することによってラグビー校との接触から新鮮な活力を引き出し、そして組織化されたシステムの対校試合をイングランドよりはやく発達させたスコットランドのパブリック・スクールに多大の影響力を有し

ていた。アーモンドはそのような競技会を極めて重要視し、彼がそう称した公衆衛生法規である特別のトレーニング法をロレット校に採り入れた。

あらゆる天候においても規則的に運動することが強調される。；生徒は窓を開けて就寝することが奨励されるので、教室は空気が新鮮で風通しが常によい。そしてその中でも正しい食事の重要性が明らかになる。；そして食事中でさえあらゆる類の不健康をほじくり出すといった憎むべきで忌むべき習慣が教師だけでなく級長や世論によって争われるようになった。¹⁶⁾

このようなトレーニングや食事の問題においてもアーモンドは先駆者であり、彼の影響は、ある程度までは正しかった。しかし、1892年、マーチストン校で正式に採り入れられたフットボールのトレーニングの計画から判断するとこれは又、過度になり得た。

生徒は7時に点呼。その時フランネルのズボンを着用。4分の3マイル走もしくは速歩。次に水風呂に入浴しマッサージ。8時、朝食。9時から12時まで授業。

月曜日、12時30分から13時30分—ビッグ・サイド（教師とOBのチームが月曜日にフィフティーンとできるだけゲームを行う。）

火曜日、12時30分から13時—フィフティーンは下位チームの面倒を見て（一生懸命やらせる。）13時から13時30分までフィフティーンはドロップ・キックとプレース・キックの練習。ハーフとクォーターはパスの練習。

水曜日、14時30分から17時。—フットボールの試合、もしくはスクール・マッチ前であれば、Pentlandをクロスカントリー走、7～10マイル。

木曜日、12時30分から13時30分—ビッグ・サイド。

金曜日、12時から13時—学生軍事教練団

のドリル。13時から13時30分、火曜日と同様、フィールドにおいてキック練習。

15時から18時—4ピリオドありその3ピリオドは勉強、1ピリオドは体操。従って生徒は毎日体操を約40分行うことになる。

金曜日の夜、それにフェンシングとボクシングが加わる。フィフティーンも又、予習したあと毎日これを行う。¹⁷⁾

これによって生徒が身体を強く健康になったのは確かであった。朝のランニングは言うまでもなく毎週6時間のフットボールとクロスカントリー、4時間の体操そして3時間のボクシングとフェンシングはフィフティーンにとってさえた時はむしろ過度であったかもしれない。しかし、このスパルタ方式はTom Brownの筋肉キリスト教主義について背理法と言われるかもしれない。そして、それはこれより50年前にトーマス・アーノルドによって最初に決定された方針から自然な歩みによって生じた論理的発展であった。

これは当然のことながら批判無しには済まなかった。1858年にフィッツージェイムズ・ステューブンはエジンバラ紙でTom Brown's Schooldaysについて論評して、それはスポーツをあまりにも強調し過ぎていと断言した。彼はフットボールは「楽しみ以外の何ものでもない。」そしてフットボールは「戦闘と犠牲の間の何かになってしまった。」と異議を唱えている。フットボールを行わない生徒は臆病者と看做され、社会の敗北者となる。自己依存が破壊され知的水準が低下する。¹⁸⁾このようなことは学校当局によってゲームが強要されるのが一般的になる前であった。同じ時をしてイートン校のオスカー・ブローニングは教師の役割は別の方向にあると彼特有の主張をした。「生徒は必ずやその身体を誉め称えるであろうが、生徒にその精神を誉め称えさせるのが教師の務めである。」と述べた。しかし、そのような批判は、ゲーム礼賛の時代の初めには多くの支持者がいたに違いないが少数であった。

しかし生徒にフットボールのゲームが強制的に課せられたと推測するのは誤りであるかもしれない。生徒のほとんどがフットボールのゲームを好んだし、フィッツージェイムズ・ステューブンは示唆したように、生徒は彼等自身の専制支配を確立するのがまったく可能であった。事実、この専制支配に公式の支持を得るためにあらゆることがなされた。生徒が専制支配を確立することによって彼等の意見が承認済みの慣例となった。若干のパブリック・スクールではフットボールに夢中になることが何か宗教に近いものとなり、チームのメンバー、特にキャプテンや際立ったメンバーはこの世の神の如く振る舞った。ゲームで成功を収めることが最高の達成と看做されるようになった。Tom Brown's Schooldaysの中で1840年位に、兄のブルークはベイリオウル奨学資金を得るよりはむしろ寮の対外試合に2度続けて勝った方が有難いとはっきりと述べた。価値のこの逆転が一般的になりその時以来、たいていのパブリック・スクールではフットボールのキャプテンが常に大学の奨学資金の獲得者より偉大なる英雄であった。

Tom Brown's Schooldaysに興味深い節がいくつかあるがそれはトーマス・ヒューズの樂觀的な見方を通じて見られるような1840年ごろの生徒の物の見方を示している。これらの1つにおいて兄のブルークは問題をさし出している。兄のブルークにとって弱い者いじめや飲酒は、それによってフットボール選手を下劣にするので嘆き悲しむべきものであったが、教師は最初はフットボールのゲームを弱い者いじめや飲酒を防ぐために奨励した。

弱い者いじめをする人間は卑怯者です。そして卑怯者が一人でも出ると後から後から仲間が増えます。ですから弱い者いじめがはやり出したら寮の対外試合はもうおしまいです。(下級生の間から大喝采まき起こる。この連中はテーブルの席についているフラッシュマンその他を意味ありげに見

やる。)それから居酒屋で酔っぱらったり、悪酒やパンチやこれに類する有害な飲み物をあおっています。こんな事をしてはいいいドロップ・キックや突進はできっこなし、これは私が保証しておきます。¹⁹⁾

ヒューズが兄のブルークにアーノルドの徳目の典型のすべてをそのように語らせる際、アーノルドや彼の信奉者が直面した問題を生徒がどのように見ているかを意識的に与えているのはもちろんである。しかし、別の一節においては徳目を説く試みが欠落しており、ヒューズはフットボール自体のために熱狂的な熱意をもって記述している。

これこそ生甲斐ある生活だ。学校生活の総体が緊張と興奮の半時間に凝集したのだ。この半時間は普通の生活の一生間に匹敵するはずだ。²⁰⁾

ここでヒューズは生徒としての自分自身の感動を呼びさましており、それらを思えば彼は感傷的になっているかもしれないが、彼にとってフットボールは若い頃の最高の経験の1つであったことは確かである。

20世紀になってのゲーム熱の発展はTom Brown's Schooldaysが原型である多くの学校小説において研究されているかもしれない。学校小説の著者はゲームを最初は当然としてパブリック・スクールのシステムの一部と見ていたが、ファーラーは2つの長編小説であるEric, or Little by LittleとSt. Winifred's, or the World of Schoolにおいてフットボールを全面的に無視し、クリケットについてほんのわずかしき記述しないことによって批判をほめかした。しかし、パブリック・スクールの生活についての描写を試みる20世紀の著者たちは一般的に、ゲーム熱に賛意を示すかもしくは批判的姿勢をとるかいずれか一方であった。彼等はゲームを学校生活の当然で重要な一部としてとらえ、この点でトーマス・ヒューズに従うが、生徒の自己存在の最高の表現を見出すものとしてとらえた。あるいはアスレティズムを全くの

悪として看做し、敵意ある批判的姿勢をとった。それは彼等の学校での経験やスポーツに対する姿勢にかかっているのは疑いのないことである。しかしいずれの場合においてもそれが感傷であろうが風刺であろうが、若干の誇張があることは認めなければならない。

アスレティズムに賛成する例としてパブリック・スクールの下級生について同情的に叙述しているヒュー・ウォールポールのJeremy at Crale(1927)がある。この物語ではゲームそして特に「rugger」がヒーローの生活の中で重要な役割を果たしている。しかし、それらはTom Brown's Schooldaysよりさらに楽観的に見られ理想化され、空想的性格を与えられている。ウォールポールにとって自己を彼が描いたヒーローの人格、つまり「rugger」に置くことは30名の生徒がボールを泥の中、あちこちに押し進めるといった単なるゲーム以上のものである。それは最高の感動的な経験である。例えば寮の練習試合でスクラム・ハーフをやっているJeremyの姿がある。

正統なものであろうとなかろうと、いずれにせよ、それは素晴らしき午後であった。彼にはこの試合の歓喜や恍惚を妨げるものは何も感じられなかった。彼にはボールがどこへ行こうとするのか、ボール自身が知る前にははっきりと知ることができただろう。彼は蹴ることも、打ち身も、痛みも、反則も何も意識しないままにプレーした。彼の身体は神授の靈気でできたオリンポスの神々だけが知っている不死なる身体のものであった。興奮はしていたものの、頭脳は冴えわたり明晰を保ち、眼は瞬間にいたるところを見渡し、短い鉄でできた脚はグラウンドを敏捷に駆けめぐり、手はどんなボールもつかめないものはないというように危なげないものであった。そのような神聖なる日は生涯のうちにめったに訪れることのないものだが、そのような日が訪れる時にはそれは必然的で当を得たものに思わ

れるものである。いつもこのようにいかな
いものだろうか。単純にして自然。児戯の
ごとき造作のなさ。絶妙なる安楽さと恍惚
的な自然の律動。嗚呼、神々は嫉妬してそ
のような歎びを私たちに与えたのはただ不
意に奪い取られるものとしてだけのものと
して、また今あるように死を免れない身体
であることを思い知らせるためなのだろう
か。

ヘリウムを打ち倒し

不死なる神々の神秘の塔を

打ち倒すが如く……。²¹⁾

フットボールのゲームについていままでその
ように感じた生徒がいなかったのは確かであり、
ちょっとした非現実的な空想として全体の
事態を嘲笑したくてたまらないかもしれない。
しかも、かつてゲームを楽しんだ経験のある成
人の読者であれば、これには Tom Brown's
Schooldays の一節のように、たとえ、それが
劇化され過ぎたり、脚色されているにせよ、真
実の要素があることを理解しており、さらにこ
れらのような語でそれを表現する妥当性を認め
るだろう。

ゲームに対する美学的接近法があるが、この
種の想像力に富む作品、そして又、ネビル・
カルダスのクリケットのように現代のスポーツ
文学のために示唆を与えるものがある。それ
は、20世紀初めにこの問題についてなされた若
干散文的な詩とは異なるゲームについての本物
の詩さえ生じさせた。レフロイは19世紀末以前
にクリケット選手に見出したようにフットボ
ール選手に美を見出したが、その美とは形態そ
して動作の美であった。彼のフットボール選手
についてのソネット（14行詩）は肉体の美的喜び
の表現であり理想化されそして崇高化された選
手崇拝の表現である。

If I could paint you, friend, as you stand
there,

Guard of the goal, defensive, open-eyed,

Watching the tortured bladder, slide and

glide

Under the twinkling feet; arms bare,
head bare,

The breeze a-tremble through crow-tufts
of hair;

Red-brown in face, and ruddier having
spied

A wily foeman breaking from the side,

Aware of him, -of all else unaware :

If I could limn you, as you leap and fling

Your weight against his passage, like a
wall ;

Clutch him and collar him, and rudely
cling

For one brief moment till he falls—you
fall :

My sketch would have what Art can
never give,

Sinew and breath and body ; it would
live.²²⁾

純粋に身体的なレベルでのプレーヤーの賞賛
そして、ゲームにはプレーヤーそして観客に与
える喜び以上の意義や目的があるという考え、
その二つの見解が近代時代の特徴であった。し
かし、その状況には別の側面があった。このよ
うなスポーツの理想化と並行してパブリック・
スクールにおいてゲームが礼賛されることによ
ってシニシズムが膨らんでいった。それは20世
紀だけの現象のようであり、意に沿わずゲーム
を強いられた多くのあまり活動的でないパブリ
ック・スクールの生徒の心の中に蠢いていたに
違いないアスレティシズムに対する反感を表し
ていた。アスレティシズムに対する公然とした
反感の徴候はほとんどなかった。たいていの場
合、アスレティシズムの犠牲者は強制的なゲー
ムを余儀なくすることを黙って認めた。公然と
反抗し、そのために罰せられた生徒が若干はい
たかもしれないが、そのアスレティシズムに対
する悪感情は残ったままであった。ごく少数
は、卒業するとすぐに小説を書くことによって

報復を行ったが、それらの小説はアスレティシズムだけでなくパブリック・スクールの生活の裏の側面を暴露するものであった。その典型でこの種の小説の例がアレックス・ウォーのThe Loom of Youth(1917)であった。その著ではここで問題にしているところに適切なフットボールについての論題の多くが記述されている。この著は、事実、アスレティシズムを容赦なく公然と非難している。その特徴の一つはゲームは目的のための手段でなく本来そうあるべきであるようにゲーム自体が目的になったと述べることによって、その小説の背景である虚構ではあるが多分に少し形を変えたパブリック・スクール、ファーンハースト校での状況を概要している。²³⁾その著の全体の傾向はフットボールに優先されている学校もしくは寮の生活を詳細に描くことによってこの主題を発展させ確証している。それは理想化がまったくなされておらず、うわべの言葉や感傷性がないために極めて信頼できるものである。これによって、スポーツの強迫観念が優勢になった時、生徒が寄宿学校の過酷で現実的な世界でどのように考え、感じ、行動しているか感じることができる。

寮対抗の試合の間、熱狂的な雰囲気ははっきりと生ずる。試合の前、誰も試合以外のことは考えることができない。どんな行為もなされない。プレーヤー自身は不安になり、神経質になり、他のすべての者は異常な状態にある。ゲームの最中、教師を含めて観客は異常に振舞い、プレーヤーも時の勢いで彼等が当然すべきである紳士的行為の規準を忘れて異常に振舞う。²⁴⁾事実、ウォーは非スポーツマン的振舞いを際立たせることによって、フットボールのゲームが学校もしくは寮の強烈な対抗意識の状況でなされる時、フットボールがどれ程不快なゲームになり得るかを示している。イングランド代表の選手である舎監でさえ尊厳や自制心を忘れ地団太踏んで行ったり来たりしたり、歯ぎしりしたりそして味方チームのメンバーを連れて大声で叫んだりしている様子が示されている。²⁵⁾一

方、プレーヤーたちはフェアであろうとアンフェアであろうと是が非でも勝ちたいという激しい熱望でもってあらゆる体面を捨ててしまう。ヒーローであるゴードン・カルサーズが立腹してスクラムの中で相手を踏みつけたり激しく肘を振って突進している。相手はゴードンの足首をとらえて倒す。他の者が彼の側頭部を蹴る。全くルールが無きが如しで技術よりは暴力が理想となっている。²⁶⁾

このようなことが起こったのは確かであり、それはファーンハースト校だけではなかった。会戦の真最中、それらが例外であって規則でなければ、多分に見過ごされ、許されたかもしれない。しかし、それらのことをその著から知ると若干後味の悪さが残るが、ウォーは読者がこの後味の悪さをとどめるのを切望しているのは明らかである。彼は高いレベルの行為が行われていると推測される学校の試合でのゴードンと相手スクラム・ハーフとの反目を記述している。ゴードンは相手スクラム・ハーフにボールをスクラムに真つすぐに投入しなかったと非難したが、それに対し相手スクラム・ハーフによって不快な言葉で対応されている。ゴードンはそれに対し次の機会にたとえその時にタッチにあったにしても相手を激しくロープに投げつけることによって報復している。これらのやりとりの間、レフリーが何をしていたかは不明である。いずれにせよ、そのような事態は試合が終了するまで継続されるが、大腿の打ち身だけしかないゴードンの状況は有利であるが、相手は口びるが張裂け、鼻から出血している。しかし、ファーンハーストの輩は汚い野郎だと言っているのを聞いた観客の一人によって道徳的判断がなされている。²⁷⁾

寮の試合での別の場面において、ボールから5ヤード離れた位置で相手プレーヤーの頭の上に座って、「こんちくしょう!こんちくしょう!こんちくしょう!こんちくしょう!」と大声で叫び、そのためにレフリーに叱責されているプレーヤーが認められる。²⁸⁾この出来事は少しも

こっけいであることはない。樂觀的に見ている校長やパブリック・スクールの卒業生がウォーに閉口したとしても少しも不思議ではない。ウォーでさえゴードンに別の寮の誰かを買収して恨みを抱いているプレーヤーをたたきのめすようにさせており、それが日常茶飯事であるので、ゴードンが校長に問われて、その事実をまったく思いつけずに、「そうですね、先生、それは誰でもがやることですよ！」と弁明している。²⁹⁾

これらの出来事は寮の間の悪感情の背景で生ずる。最終的にゴードンの寮が勝利するが、あらゆる束縛の状態が解放され、その出来事は戦争の勝利を祝うのとまったく同じ精神で祝われる。寮の全体がお茶のあと集合する。そのチームには壇上に榮譽の席が与えられる。スピーチがなされる。大声の叫びがあり、金切声があり、テーブルがたたかれる。ほこりが霧のように舞上る。万事が終了したら、ゴードンと彼の友人はラグタイムのコーラスに満足し、リラックスする。³⁰⁾しかも学校ではフットボールが頻繁に行われ、トレーニングに重点が置かれるのでその時のチームのメンバーでさえ疲労困憊する。

ゲームにとりつかれる学校のこの描写は多分に誇張されている。それはほとんど虚構の作品のはずであった。しかし、その時代ごろにパブリック・スクールにいた多くは、それには事実の根拠があることを知っており、そしてウォーが晒し台に晒した害悪は事実、パブリック・スクールでは、決してすべてではないが多少は存在した。それは19世紀初頭、ラグビー校で始まった過程の最終段階であった。

しかし、事実、ゴードン・カルサーズが詩に関心を持ち、彼が過ごしていたフットボール主体の無意味さを理解するようになった The Loom of Youth で示されているように、アスレティズムに対する反動がすでに始まっていた。この時期、パブリック・スクールにいた者の自叙伝は同じ物語をしている。ロバート・グ

レイブスは、彼の自叙伝である Good-by to All That においてチャターハウス校のアスレティズムに対する自己の戦いについて記述しているが、The Loom of Youth と匹敵できる多くの手法で状況を描写している。選手、特に「bloods」として知られるクリケットの選手やフットボールの選手が次のように記述されている。

bloods はチャターハウスでは支配階級であった。；フットボール・イレブンの第11番目のプレーヤーは、第4学級以下のメンバーであったが、第6学級の最優秀の生徒より極めて多くの特権を謳歌していた。「学校長」でさえ、空虚な称号であった。……………しかし極めて特別な厚遇が bloods のためにとっておかれた。これらは薄灰色のフランネルのズボン、蝶ネクタイ、背中にスリットの入ったコート、そして腕を組んで歩く特権などであった。³¹⁾

しかしゲーム礼賛に反対する第6学級の優秀なボクシングの選手3名によって bloods の虚勢が発かれ、その後 bloods の権威は衰退した。³²⁾グレイブスによると、この出来事はチャターハウスのゲーム礼賛に対する反動の絶頂と開始を際立たせた。チャターハウス校の卒業生ならば彼の物語全体が彼等の学校の中傷であると考えても無理はないが、それがその当時なされていたことの一つの見方を表しているのは確かである。

むしろ、ルパート・ブルークの学校生活の間ラグビー校はより感じよい印象が与えられている。そこではアスレティズムが支配的でなく、正常な雰囲気は支配的である。しかし、選手であることが基準であり、詩人もしくは知識人は若干疑々を持って見られた。ルパート・ブルークは選手と同時に詩人であることによって—というのは彼は美学社会のリーダーであると同様フットボールではファースト XV そしてファースト XI であったからであるが—ラグビー校に古い秩序が存在する限り、それを取り除

くの助力した。³³⁾

これら二つの例は、アスレティシズムに対する反感を例証している。強制的なゲームは今まで全般的に認められており、生徒は学校にゲームを組織化する必要条件に容易に順応した。生徒は彼等の時間をより有益に使うとか他の方法で満足するということが多分になかったかもしれない、ヒュー・ウォールポールの Jeremy のようにゲームを行って楽しんだ。しかし、より啓発された姿勢態度が広まり、ラグビー校を含めて多くの学校において学校当局は生徒が学外で時間を過ごすことが可能な幅広い活動を意図的に奨励し始めていったのである。

結

今日、フットボールもしくは他のどんなゲームでもそれをのみやっている学校を見出すのは多分に不可能である。フットボールのゲームが英国パブリック・スクールにおいてより頻繁に行われていたのは事実であったし、寮対抗の試合が多量の興奮を生起させたのも事実であった。クリケットやフットボールを適切なトレーニングと看做した人々が多かったが、それとは他の方法で時間を過ごすといった主張が認められるようになった。フットボールのゲームを自由選択にまでした学校があったが、それによって昔の方法で教育を受けた人々の多くにショックを与えたという事実は決して過去は死んではなかったことを示した。しかし、結局、パブリック・スクールにおけるゲームは大学のように組織化されていき、フットボールは最も人気あるゲームであり続けたのは確かであった。

註及び引用・参考文献

- 1) Richard Mulcuster, Positions, 1581, p.p. 104-105.
- 2) J.Spencer Hill ed., Annals of Shrewsbury School, 1899, p. 313. (原典: fit only for butcher boys)
- 3) C.Wordsworth, Annals of my Early Life, 1891, p. 9.

- 4) J.Spencer Hill ed., *ibid.*, p.p. 404-407.
- 5) Thomas Hughes, Tom Brown's Schooldays, Dent, 1985, p. 96. (原典: seems as anxious as any boy for the success of the school-house.)
- 6) Balliol: ベイリオウル学寮。オックスフォード大学内の学寮の一つ。ここは競争がはげしいのでこの寮の奨学金を獲得するのは一番難しいとされていた。
- 7) Thomas Hughes, *ibid.*, p. 110 (原典: I know I'd sooner win two School-house matches running than get the Balliol scholarship any day.)
- 8) E.C.Mack, Public Schools and British Opinion (1780-1860), 1938, p. 217, note 5.
- 9) A.G.Bradley, History of Marlborough, London John Murray, 1893, p. 137, p. 147.
- 10) E.C.Mack, *ibid.*, p.p. 351-352.
- 11) Routledge, Hand book of Football, 1867, p. p. 9-10, quoted in Marples, A History of Football, Martin Secker & Warburg, 1954, p. 122 (原典: Strong hearty fellows became muscular instead of fat; little active fellows improved their running and staying power; a generous feeling of rivalry in Houses and Forms sprang up: A halfholiday was never known without a match, the public-houses were emptied of their thoughtless occupants, and all the vicious amusement were abandoned.)
- 12) Quarterly, October 1857, p. 334, quoted in J.Spencer Hill ed., p. 299.
- 13) R.L.Archer, Secondary Education in the Nineteenth Century, 1928, p. 228, quoted in Marples, *ibid.*, p. 124.
- 14) H.H.Almond, Rugby Football in Scottish Schools, Marshall, p.p. 53-65, quoted in Marples, *ibid.*, P. 124. (原典: It is perhaps, under all modern circumstances, (the school's) best instrument of education, in the true and wide sense of that word; for I cannot conceive of any school making a good stand-up fight against the soft and self-indulgent ways of living in which town boys, at all events of the richer classes, are usually brought up, in which football is not a flourishing institution.)

- 15) H.H.Almond, *ibid.*, quoted in Maryles, *ibid.*, p. 124. (原典：to produce a race of robust men, with active habits, brisk circulations, manly sympathies and exuberant spirits.)
- 16) H.H.Almond, *ibid.*, p. 58 quoted in Marples, *ibid.*, p. 125. (原典：Regular exercise in all weathers is insisted upon; boys are encouraged to sleep with open windows and school-rooms are kept fresh and airy. And perhaps above all, the importance of a proper dietary becomes evident; and the detestable and loathsome habit of grubbing all sorts of unwholesomes, even between meals, becomes warred against not only by masters, by prefects and by public opinion.)
- 17) H.H.Almond, *ibid.*, p.p. 58–59, quoted in Marples, *ibid.*, P. 125. (原典：Boys are called at 7, when they turn out in flannels, and have a run or smart walk of about three-quarters of a mile, then a cold bath and rub down. Breakfast at 8; school from 9 to 12.
Monday, 12.30 to 1.30—Big Side (as often as possible a team of master and old boys play the Fifteen on Monday.)
Tuesday, 12.30 to 1—The Fifteen look after the lower teams and make them play up. From 1 to 1.30 they practise drop and place—kicking, and the halves and quarters practise passing.
Wednesday, 2.30 to 5—Football match, or if before a school match, a cross—country run of from seven to ten miles, usually over the Penthand Hills.
Thursday, 12.30 to 1.30—Big Side.
Friday, 12 to 1—Cadet Corps drills; 1 to 1.30, kicking in field as on Tuesday. From 3 to 6—There are four periods, three of work and one of gymnastics every day. One Friday night they have in addition fencing and boxing. The Fifteen have also half an hour of this every night after preparation.)
- 18) E.C.Mack, *ibid.*, p.p. 380–381.
- 19) Thomas Hughes, *ibid.*, p. 111. (原典：Bullies are cowards, and one coward makes many; so good-by to the School-house match if bullying gets ahead here—(loud applause from the small boys, who look meaningly at Flashman and other boy at the tables). Then there's budding about in the public-house, and drinking bad spirits, and punch and rot-gut stuff. That won't make good drop kicks or chargers of you, take my word for it.)
- 20) Thomas Hughes, *ibid.*, p. 99. (原典：This is worth living for; the whole sum of schoolboy existence gathered up into one straining, struggling half-hour, a half-hour worth a year of common life.)
- 21) Hugh Walpole, *Jeremy at Crale*, Cassel and Co.Ltd., 1927, p. 225. (原典：He was conscious of nothing save the rapture and ecstasy of the play. He seemed to know exactly where the ball would be long before the ball itself knew. He was unaware of kicks or bruises, pains or penalties. His body seemed to be made of some divine ether, an immortal body such as only the gods in Oylmpus know. Excited though he was, his brain was cool and clear, his eyes everywhere at once, his short legs of iron and yet swift about the ground, his hands so safe that no ball was too difficult to take. Such divine days come but seldom in a lifetime, but when they are there, how inevitable and right they seem! Why should it not be always like this? How simple and natural! What child's play! What heavenly ease and ecstatic natural rhythm! Alas, the gods are jealous, and allow us such joys only to snatch them abruptly from us and prove to us the mere mortals that we are!
..... So fell Illium
and the mystic towers
of the immortal Gods!.....)
- 22) Text from *An Anthology of School*, 1928, ed., C.S.Holden, p.p. 68–69, quoted in Marples, *ibid.*, P. 130.
- 23) Alec Waugh, *The Loom of Youth*, ed., 1929, p. 174.
- 24) Alec Waugh, *ibid.*, p. 178.

-
- 25) Alec Waugh, *ibid.*, p. 127.
- 26) Alec Waugh, *ibid.*, p. p. 127-128.
- 27) Alec Waugh, *ibid.*, p. 193.
- 28) Alec Waugh, *ibid.*, p. 275.
- 29) Alec Waugh, *ibid.*, p. 220.
- 30) Alec Waugh, *ibid.*, p. p. 225-226.
- 31) Robert Graves, *Good-bye to All That*, ed. , 1977, p.p. 42-43. (原典 : were the ruling caste at Charterhouse ; the eleventh man in the football eleven, though a member of the under-fourth form, had a great deal more prestige than the most brilliant scholar in the sixth. Even 'Head of the School' was an empty title. very peculiar and unique distinctions were reserved for the bloods. These included light grey flannel trousers, butterfly collars, coats slit at the back, and the privilege of walking arm-in-arm.)
- 32) Robert Graves, *ibid.*, p. 44.
- 33) *The Collected Poems of Rupert Brooke*, ed. , 1920, *Memoris*, xii. quoted in Marples, *ibid.*, p. 134.